1941年のハイデッガーのライプニッツ解釈
――Existenz概念の歴史によせて[1)]

酒井 潔

序

2020年10月、ハイデッガー全集「第三部門：未刊行論文、講演、思索」第80.2巻『諸講演（第二部：1935–1967）』がギュンター・ノイマンの編集により公刊された。そこには、『芸術作品の根源』、『ニーチェの言葉《神は死んだ》について』、『技術への問い・草稿』など戦前から戦後に行われた周知の諸講演にまじって、「**現実存在の概念の歴史について**」（***Zur Geschichte des Existenzbegriffs***）と題する長編の講演が収載されている（GA80.2, S. 849–886）。これは、三つのヴァージョンを含む『芸術作品の根源』を除けば、本巻中最長である。編者の「考証と解説」によれば、原稿の表紙には題目が付され、赤鉛筆の下線付きで「第一草稿」と記され、「講演1941年6月7日意図的に史学的―学術的な表現の形式で行われた（mit Absicht in der Form des historisch-gelehrten Darstellens gehalten）」と注記されている[2)]。これはフライブルク大学の教員の会合

1） 2022年7月3日京都ヘーゲル読書會令和四年度夏季研究例会（於・京都教育文化会館）における口頭発表の原稿に修正と加筆を施したものである。2022年8月2日に急逝されたフリードリヒ–ヴィルヘルム・フォン・ヘルマン教授の霊前に本稿を捧げる。

2） GA80.2, S. 1374

（Kränzchen）で行われ[3]、当時流行のヤスパースの実存哲学、あるいは中世の essentia と existentia の区別、あるいはカントの様相概念などを通じて普及してはいた Existenz 概念の、その歴史の考察である。（1941 年といえば『寄与論稿』執筆の 3 年後、「存在の歴史」の立場が形成され間もない時期で、『ニーチェ』（1961）所収の諸論稿の執筆も始まっていた。また同じ 1941 年の講義には「附録」として Existenz 論とライプニッツ論を含む（GA49, 193–203）。本講演の冒頭目を惹くのは、以下の考察は、ライプニッツが彼の形而上学の核を表した『二十四の命題』（GP VII, 289–291）の研究解釈〔の困難〕を軽減するのに資する、と述べられていることである。ライプニッツとの取り組みは「将来のドイツおよび西洋の思惟」を創造的にするのに不可欠であり、ライプニッツ哲学の本質的摂取は、有るものの有を存在論的に規定する Existenz の理解にかかっているのだ、とされる。大事なことは、解釈史の隙間無き叙述ではなく、「この概念の歴史において、形而上学そのもの（そして有るものそのものの真理としての形而上学）の決定的な諸変遷を見えるようにすること」である。さらに注目すべきは、ハイデッガーがギリシアから近世にいたる「史学的」（historisch）な叙述を意図的に行っていることである[4]。この講演は、出版の予定もなく、修正版も存在せず、GA80.2 で初めて公表された謎の講演である。語源考証を駆使したその史学的考察は、彼の「存在の歴史」からのライプニッツ解釈はもちろん、形而上学における existentia 概念の形成の出来事を論じており、きわめて注目に値する。

本論文は次のように進められる。まず、ハイデッガーの上記講演の概要、すなわち Existenz/ existentia 概念のギリシアから近世への変遷について

3） Ibid. 定期開催されていた教員倶楽部ともいえる Kränzchen については、Eckhard Wirbelauer（Hrsg.), *Die Freiburger Philosophische Fakultät 1920–1960*, bes. S. 593–620.

4）「史学的な」叙述法には、彼自身の哲学へ至る「予備段階」という意味と、哲学者だけではない聴衆への「配慮」がある、と編者ノイマン博士は示唆する（2022 年 6 月筆者宛電子メール）。しかし筆者は、本講演の叙述として「史学的」なそれを選択したことにはもっと積極的な意味が込められている、すなわち、Existenz 概念の解明には事柄の性格上、史学的な考察が不可欠である、とのハイデッガーの判断から来ている、と考える。

その概要を示す（―Ⅰ）、次に存在者の「現前性」（Anwesenheit）が中世に「現実性」（actualitas）にとって代わられたとハイデッガーは再三強調するが、その妥当性をトマスの「存在」（esse）概念を参照して検証したい（―Ⅱ）、そのうえで、本講演がその理解を助けるとされるライプニッツ『二十四の命題』について、その existentia 概念に焦点をあて、これが一方では actualitas の近世的系譜に属しながら、同時に、「可能性」（possibilitas）――ライプニッツでは、「existentia への衝迫」を意味する――と一体として見られている点を明らかにする（―Ⅲ）、そして、中世以来の伝統的な「essentia と existentia の区別」をその起源へ向けて解体せんとするハイデッガーの解釈と、「possibilitas と existentia」をめぐるライプニッツの解釈とのあいだには或る共通した重要なモチーフが見出されることを示す（―Ⅳ）。最後に、ハイデッガーにおける、古典テクストや語源考察を駆使した「史学的な」哲学史解釈と、「存在史的」な「性起」の思惟との関わり合いをどのように考えるかについて、筆者の見通しをごく簡潔に述べておきたい。

Ⅰ．講演「Existenz 概念の歴史について」（1941）―その概要と特徴

〔1〕ハイデッガーによれば、Dasein や Wirklichkeit として自明視されている existere だが、ギリシア人はこれに対応する語を持たず、「**εἶναι**」（有る）と呼んでいた[5]。οὐσία（有るもの）（οὐσία は εἶναι の分詞女性形由来の名詞）は、本来、物とか実体よりも、Anwesen（現前）, Anwesenheit（現前性）, Anwesung（現前化）を意味した[6]。そして Anwesen とは持続であり、「時の間に滞留すること」（in einer Weile verweilen）を意味

5） GA 80.2, S. 855–857.

6） 後に οὐσία は「実体」（変化する諸性質の下に横たわり固執するもの）として解されてしまう。ibid.

したのである。これが中世哲学やキリスト教神学になると、「作品」（opus）や、原因（causa）によって産出された眼前的なものという意味に転じる。これが「現実存在」（existentia/existere）と見なされ、しかも「本質」（essentia）との区別[7]とともに捉えられる。existentia は essentia から切り離される。そしてカントでは物の規定にも属さない「様相の範疇」として、認識能力への関係から解されるのである[8]。

続いてハイデッガーは、ὅτι ἔστιν （が有る）が、どのようにして τί ἔστιν（何で有るか）から区別されて行くのかを論じる[9]。プラトンは「現前」から「〔物の〕何であるか」を思惟し、「エイドス」（ἔιδος）、「イデア」（ἰδέα）、「共通のもの」（κοινόν）とも呼び、「外見」（Aus-sehen）（有るものがその何において現前しているのかが外に見えること）として捉え、これに優位をもたせた。οὐσία（有るもの）は「何で有るか」という仕方の現前なのである。

アリストテレスは ἔιδος（個の現前化の現在）を存在の固有で決定的な仕方と認識し、ここに「現実存在」を認める。「何で―有る」に対して、「が―有る」は「個々のもの」、「このこれ」（das Jeweilige, τόδε τί）であり[10]、それは「現前のそのつどの仕方」であり、こちらが本来的に有るものとされた。アリストテレスはプラトンのイデアを感覚界の事物に引き下げたとの通説に対し、ハイデッガーは、個物は、「個々のもの」（das Je-weilige）のその「時〔の〕間」（Weile）として、しかも際立った仕方の現前の時

7）「essentia と existentia の区別」については、1924 年夏学期講義は「実在的区別」（トマス）、「様相的区別」（スコトゥス）、「概念的区別」（スアレス）をあげているが、その主旨は、いずれも「区別」を前提する点では同じだ、という点にある。GA24, S. 124–139.

8） GA24, S. 139. また 1935/36 年冬学期講義『物への問い』では、「現実性」（Wirklichkeit）は、ただ感覚（実在的なもの）との出会いにわれわれの表象力が関係することを意味し、同時にそのことにより「実在性」も現実性に不当に同一視される、と言われている（GA41, S. 251）。けだしこのハイデッガーの指摘は重要である。カントも存在者を現実的つまり可感的な物と、これを知覚・認識する心の二種類に狭め、思惟対象（ノエマ）としての存在すなわち「ratio（概念）」を（少なくとも結果として）哲学から放逐した。山田（1986）, 733–738 頁参照。

9） GA80.2, S. 853f.

10） GA80.2, S. 854.

の間、すなわち「滞留」（Ver-weilung）としての「現前化」に他ならないと見る[11]。そして、アリストテレスでも οὐσία（有るもの）の常立性や有るもの性は「現前化」から思惟されており、むしろプラトンよりも先へ行っている、と評する。つまり、アリストテレスは、後代の「Was-sein と Daß-sein の区別」を前提してはおらず、むしろ οὐσία の異なった仕方の現前として統一的に把握した、とハイデッガーは解釈するのである。「第一実体」と「第二実体」の区別も οὐσία の現前の異なった仕方に他ならない。前者は個（それ自身から「このこれ」として現前する）としての本来の現前（この人間、この馬）であり、後者は、個の見え方、εἶδος の自己示現なのである。

しかしウシアを後の人は現前ではなく、substantia（実体）と解してしまう。οὐσία のラテン語訳が essentia であるとすれば、ギリシア的に考えれば、existentia は、essentia のひとつの際立った仕方である。後に「existentia」と呼ばれるものは、アリストテレスによって「そのつどの個々のものの滞留」（Verweilung des Jeweiligen und Einzelnen）として概念把握された。ゆえにギリシア人の理解からすれば、後に existentia と呼ばれるものも、essentia に劣らず、「現前化」・「非覆蔵的なものへ出で来たること」（Hervorkommen ins Unverborgene）・「αλήθεια」・「φύσις」を指示するのである。プラトン以前の哲学が「essentia と existentia の区別」を知らなかったことは、欠陥ではなく、むしろ長所であった、とハイデッガーは言い切る[12]。要するに、本来は essentia と existentia は区別の上に立つのではなく、どちらも現前であり、現前の仕方のその違いに過ぎない。

アリストテレスこそは、οὐσία にとどまらず、その後の existentia, Existenz, Wirklichkeit, Dasein と呼ばれるものを規定し、そのつどの現

11） アリストテレスこそは、個々のものを、das Je-weilige（それぞれの–時の間）として概念把握した最初の人である。GA80.2, S. 855.
12） GA80.2, S. 857.

前するものの「時の間」（Weile）のなかに、作り出されたものの「静止」（すなわち運動）を認識した。それぞれの個の「逗留」、すなわち「第一ウシア」は、運動からより充実した規定を受け取る。例えば、「この家」がその「外見」（Aus-sehen）にもたらされたとすれば、それは〔存在に関してみれば〕作られた結果や作品（Werk）ではなく、むしろ ἔργον（はたらき）、すなわち、「現前化のうちに置かれ」、「そのように滞留しているもの」である[13]。そして ἔργον として現前し、ἔργον の性格の「うちに」現出することが「ἐνέργεια」（このこれ τόδε τι の現前化）と呼ばれる。それは「οὐσία τὸ ἔσχατον」として、現前化の極端で最後のものへ向けて見られた有るもの性といえる[14]。

しかしこの ἐνέργεια は、ハイデッガーによれば、ローマ人の「非力」（Unmacht）によって、actualitas に変質する（それは見かけは直訳だが、西洋の真理の歴史、それどころか西洋の歴史全体における決定的な変化である）。この変質の結果、活動や、現実的なものが有るものと見なされる。個々の有るものは「ἐνέργεια ὄν」だが、今や「ens actu」となる[15]。

かくて existentia は、「ものが原因と無との外に立つこと」であり（rei extra causa et nihilum sistentia）[16]、作用によって生み出されたものに変質する。それは「有るものを可能性の状態を超えて―据えること」（Hinaus-setzung von Etwas aus dem Stande der Möglichkeit）であるとハイデッガーは記している[17]。

アリストテレスはウシア＝現前性に ἔργον という性格を付け加えた。しかし、それでもなおウシアの ἐνέργεια は現前性、滞留、時の間として解さ

13） ἔργον ＝das in die Anwesung und so ins Offene des Aussehens Her- und Dahin- und Aufgestellte und so Verweilende. GA80.2, S. 858.

14） GA80.2, S. 859: Aristoteles, *Metaphysica*, Θ,7, 1049 a 34.

15） GA80.2, S. 860.

16）出典として、フランスのドミニコ会士 Antoine Goudin（1639–1695）の *Philosophia juxta inconcussa tutissimaque Divi Thomae dogmata. Logicam, physicam, moralem, et metaphysicam quatuor tomis complectens* の 1851 年の版があげられている。GA80.2, S. 861, Anm. 24.

17） GA80.2, S. 861.

れていた。しかしローマ人によって現前の性格を失い、actualitas となる。ここに、可能と現実性、本質と現実存在がたがいに外なるものとして切り離される。「活動」とは「それによって事物が可能性の状態の外に置かれる」（Actus, quo res ponitur extra statum possibilitatis）[18] ところのものであるのに対して、「ἐνέργεια」は「非現前」Ab-wesen を意味しており、ただの作用結果としての現実性ではない（nicht Wirklichkeit als Ergebnis eines Wirkens！）[19]。

〔2〕ここでしかしハイデッガーは、近世の existentia 概念には、「ἐνέργεια から actualitas への変化」よりはるかに本質的な変化がみられる、として「実体」概念の変遷に言及する。

アリストテレスは οὐσία に二種を区別した：上位の意味は、ὑποκείμενον（他のものに帰属して存在するのではないもの、現実存在する個体―subjectum）であり、下位は συμβεβηκότα（accidens）である。前者は本来的な現前化であり、「それぞれのものの時の間」（die Weile des Jeweiligen）であった。

しかし、ラテン語の subjectum も accidens も、ギリシア語にあった「現前」という意味を隠してしまう。ὑποκείμενον の本来の意味は、「非覆蔵的にそれ自身のほうから現れる」であるが、ラテン語の subjectum においては失われ、むしろ「下に置かれたもの」、「そのうえにいろいろなものが置かれるところのもの」を意味する [20]。かくしてアリストテレスにはまだあった「現前化」の性格は消された。ギリシア人の「有るもの」（第一実体、第二実体）は、真理の固有な本質による統括（Walten）として解されており、それによれば、真理は、「そこへと滞留し現出するものが現前するところの非覆蔵性」に属している。真理の概念の変遷は、有るも

18） Ibid.
19） GA80.2, S. 863.
20）「現前するものが現前するのは、出で来たることにおいてのみであり、常立性のうちへそれ自身を硬化した現前性においてではない」（*Grundbegriffe*. Vorle. SS1941, GA51, S.114）。

のの概念の変遷を伴っている。ただそれは少しずつ変化するより、目立たないが、しかしただ一度の決定（Entscheidung）による。その決定とは、真理の本質についての決定であり、これによって「アレーテイア」（存在者の非覆蔵性）は、プラトンとアリストテレス以来、「知性が物に妥当すること」（adaequatio intellectus et rei）となる。

かくして近世形而上学が見続ける真理概念の本質的領域は、判断と客観の一致であることが明示され、ハイデッガーはまずデカルトに注意する。すなわち、デカルトは、この一致としての真理概念をさらに「確実性」（certitudo）へ変えた。それは自己知であり、対象を知ると同時に、対象を知る自分を知る。人間自身によって求められ、人間のために、人間によって築かれた知の上に、人間の地位が築かれることになる[21]。デカルトでも、existere は actualitas であり、「実際に作用していること」（Wirkendheit）である。確実性としての真理において登場する subjectum（基体／主体）は「エゴ・コギト」である。そしてコギトの活動は「私が思惟することを思惟する」（cogito me cogitare）である。これ以後 subjectum は「私」を指す名称となる。主観的であるのは、自我の表象内容について言われるのであり、自我の vorstellen と repraesentare のゆえである[22]。

デカルトでは subjectum という存在者はただ存在するだけだったが、ライプニッツではどの subjectum もそれの現実存在において「知覚する者」であり、「自我」、より適切には「自己」（Selbst）である、つまり表象し、それ自身に関わる。どの存在者も repraesentare（表現）するという仕方で existere するが、それは二つの意味で言われる。すなわち、第一に、どの存在者も、それが宇宙を vorstellen することによって有る。第二に、いずれのものも、それがそのように vorstellend で「有る」ことによって、そのものはそれ自身を vorstellen する。つまり表象すること

21） GA80.2, S. 865.
22） GA80.2, S. 867.

によって、人は何者かであるのだ。

existere はもはや「非覆蔵的なものへの現前化」をも、「個々の、そして完結したものの時の間」（Weile des Jeweiligen und Vollendeten）をも、エネルゲイアをも意味しない。existere はいまや作用することであり、衝迫的に表象することを意味する。ものの本質の現れを「求めること」（verlangen）、この「欲求」こそ existentia の根本動向である。これをライプニッツは「本質による要求」（exigentia essentiae）と呼ぶ。「本質」は「現実存在への努力」（nisus ad existendum）である。ライプニッツは可能と現実の区別を克服しようとする。ライプニッツにおいて、「ウシアとしてのエネルゲイア」と活動の現実性（actualitas des actus）が統一せられ、この統一体の統一こそが「モナス」の本質なのである[23]。

どの存在者も「subjectum」（基体、主体、主観）として認識され、主観性が成り立つのは衝迫的な表象作用、すなわち意志においてである。有るものの有は、「意志すること」（Wollen）のうちにその本質をもつ。意志は知性的な努力であり、理性は実践理性（カント）となる。自己自身を知ろうとする意志、そしてそうした知る意志こそが主観性の本質としてみられる（ヘーゲル）。かくして、現実的なものの現実性は理性であり、知る意志であり、知覚と欲求の統一である。近世の形而上学においては、すべて有るものは、表象的である、と同時に意志的である[24]。ハイデッガーによれば、ライプニッツが existentia に帰したこの「要求（exigentia）」という性格は単なる現実性（Wirklichkeit）をこえてさらなる深処を示唆し、それはシェリングにおいて主題的に明らかとなる[25]。

かくしてハイデッガーの論述は、カントもヘーゲルも飛び越えてシェリングに直行する。シェリングは、存在者の本質（Wesen）に属するものとして、単に Wirklichkeit, actualitas を意味する Existenz だけでなく、

23） GA80.2, S. 869.
24） GA80.2, S. 870.
25） GA80.2, S. 876.

Existenz に対して Grund を区別し、その区別（Unterscheidung）を強調する[26]。ここで Grund といわれるものは、ライプニッツにおける exigentia を承けるが、その意味は現実存在を意志する意志としてさらに狭められる（Verengung）。Grund と Existenz の区別を通じて、つまり Wollen ないし Wille の契機の強調により、可能と現実の区別は超えられ、可能と現実は一つのこととして思惟される[27]。

近世の「理性」（Vernunft）は存在者の「全体」を System として知る。System（体系）とは単なる総和のことではない。シェリングにおいて Sein は Wollen であり、その対象でもある。「意志する」（Wollen）とは、それ自身であろうと欲すること、あるいは主体・主観であろうとすることである[28]。現実的で「有る」ところの存在者は Wollen としての Sein をもつが、Existenz は知性の意志なのであり、これは Grund の意志に対する「反意志」である。そこには神なる意志に対してすら、神に依存しながらも離反し反抗する精神、反自己、すなわち悪が生起し、神への極端な対抗として現実存在する、という事態が見られている。このような対立の先鋭化によって、まさにそこで「有るものの最高の統一」が思惟され得る。相反するものが、同じ一つの体系から出てくる、それが体系であり、それを知るのが哲学である[29]。

以上が 1941 年 6 月のフライブルク講演「Existenz 概念の歴史について」の概要である。ὀυσία がローマ人によって actualitas に転じたこと、そしてさらに決定的な変遷として、真理概念が、ἀλήθεια から知性と物の一致に転じたことが、詳述されている。ただ、その大意、とくに後者の真

26）「Grund と Existenz の区別」については、本講演と同じ 1941 年のシェリング講義第一部第 II 章（GA49, S. 83–104）で、また「付録」（S. 196, Anhang: “Durchblick durch den Wandel des Seins als Wirklichkeit”）でも詳述されている。

27）シェリング的な Wollen, Grund への本講演終盤の言及（GA80.2, S. 870–877）は、同じ 1941 年のシェリング講義（GA49）と明らかに関係している。GA49, I. Teil, 2. Kapitel.

28） GA80.2, S. 873.

29） この見方は、ロムバッハの System の概念にも見出される。Heinrich Rombach, *Substanz System Struktur*, 2 Bde, Freiburg/München 1965/66.

理概念の変遷については、従来の研究でも屢々言及されてきた。私の見るところ、この講演の焦点は、ギリシア内部におけるソクラテス以前からアリストテレス[30]への変遷であり、その変遷は「現前」の内部で起きているという点に存する。中世を経て伝統となり自明視された〈Was-sein と Daß-sein の区別〉、〈essentia と existentia の区別〉は、通説のようにアリストテレスで行われたのではない。そうではなく、ὀυσία がローマ人において「現前」Anwesen の意味を失い、単なる actualitas として、Wirklichkeit（Gewirktheit と Wirkendsein）として見られるようになったことによる。「有るもの」が「作用の結果」と見られ、近世にはさらに「主体、主観」となり、「自我」となる歴史は、忘却された起源へ向け、問い返され、破壊／解体されねばならない[31]。

ハイデッガーは、ウシアを現前性から／へ向けて解釈し、essentia と existentia の相互外在的な区別が起きたその起源を回顧し、これを超克する思惟を示唆するのである。そのように「現に有るだけ」の現実性には回収されない性格を現前性に見て、自明視され忘却され続けた existentia 概念の内実をギリシア的起源において取り戻そうとする。そこから、彼はライプニッツにも、possibilitas と existentia、potentia と actus の区別を批判し、conatus（Drang）の概念によってむしろ連続的に、「現実存在への要求」（exigentia ad existentiam）として、動的な統一相において解釈するという立場を見出し、これを積極的に評価する[32]。

30） この頃のハイデッガーはアリストテレスに、それ以前からあったものの完成者――φύσις を ἐντελέχεια として概念把握した――と、後代に長く普及した理解の開始者という両面を見ている。GA66（*Besinnung*, 1938/39), S. 397.

31）「有るもの」の有り方に従ってハイデッガーは（1）古代、（2）中世、（3）近世という三つの Epoche を再考する。（1）有るもの＝φύσις：有るものが隠されたものとしてそれ自身へ出現し立ち現れる（aufgehen)、（2）有るもの＝ens creatum: Summum Ens なる神を原因（causa）として有るものが有るものとなる。（3）有るもの＝主観に対する対象。Subjekt-Objekt-Beziehung は近世においてのみあらわれる。このように整理するなら、この 1941 年 6 月の Existenz 講演の力点が（1）に置かれていることは明らかである。Vgl. GA65, S. 169–224.

32） しかしヴォルフにおいて existentia の意味は再びスコラの理解に後退し、「可能性の補完物」（complementum possibilitatis）として把握されてしまう、とハイデッガーは批判す

ライプニッツ自身も、1689 年 4〜11 月のローマ滞在中に、スコラの伝統諸概念を受容し、その批判的改訂を試みるなかで、「可能性」概念を、現実存在との区別を前提する見方から、むしろ連続した一体としてとらえなおし、それはまた（可能性は本質と同じ事態を指すのであるから）本質と現実存在のスコラ的区別を超克する試みである。『二十四の命題』（および GP VII 収載のラテン語諸短篇）の要諦はこの「可能性」概念の改訂である。

まさにここにハイデッガーは着眼している。ライプニッツにとっても、ハイデッガーにとっても、スコラの形而上学概念、とくに essentia と existentia の区別は、最初から棄却されるべきものではなく、むしろ内在的な考察に値するものである。conatus（Drang）の概念も、また Anwesenheit の概念も、「essentia と existentia」、「potentia と actus」というスコラの諸概念との内在的対決、すなわちアリストテレス、トマス、スアレスのテクストとの取り組み／対決のなかで着想され、形成され、練り上げられて行った、と考えられるのである。

Ⅱ．トマスにおける esse と existentia の実在的区別

この講演でハイデッガーは、ローマ人と中世の哲学は、οὐσία を現前性から actualitas へと転換し、ギリシア人の思惟の特徴は完全に消失したこと、さらにこの転換はキリスト教の創造論を形成しただけでなく、近世以降の existentia 概念の性格を決定した、と明確に批判的に述べる。ハイデッガーが中世哲学を、「存在忘却」、とくにその「essentia と existentia の区別」の系譜に属していると批判するのは、たとえば 1927 年夏学期講義『現象学の根本諸問題』に見られる（GA24, S. 128–131）。しかし、私は、彼の言う「有るもの」と actualitas の同一視、そして

る。GA80.2, S. 869.

「essentia と existentia の区別」が哲学史的には必ずしも当たらない場合が中世哲学にも存することを、トマスにおいて具体的に示したい。また、この作業によって、ハイデッガーの考える existentia/existere の意味もより明確になると思われる。

まず、οὐσία の意味がそれに転じたとされる ens actu の意味を確認する。それは、単に働きの産物（opus, factum, actus）として現実世界に存在するのではない。作品といっても、ただ有るだけではなく、作用し作用されることを属性とする。しかし「現前」の性格は失われ、これに代わって、「原因」（causa）との関連でのみ表象され（vor-stellen）、前に―立てられて見られる。そしてこの意味での existere（現実存在）が本質（essentia）と区別されるのである。

われわれは一旦ハイデッガーの命題「有ることは現前することである」（Sein ist Anwesung）を括弧に入れ、existere が中世哲学で使われた基本的な意味を確認しよう[33)]。

まず ex- は「〜から」を意味し、sistere は「立つ」、つまり、ものが具体的に何らかの限定された状態にあること、すなわち「存続、存立、現れている」等を意味する。したがって、existere は何かが存在するという事実そのものよりも、むしろその存在の起源に対する関係を含意する。つまり、「〜から出てくる、現れる、出現する」を意味し、そこから「が有る」も解されていたといえよう。（しかし十七世紀には、それは、或る物がただ単に〔そこに〕あるという意味に転じ、ものが他のものの内に持ち得るいかなる関係も考慮に入れることなしに existere が言われるようになった（とくにデカルト））

トマスにおいても、もののexistere/existentia は、この世界の特定の場所に占める存在者の現に有ること（Dasein）、現実性（Wirklichkeit）を意味する。その場合 existere には、故山田晶教授によれば、次の四つ

33） 山田（1978）、113–116 頁（Gilson, *L'être et l'essence*, 1962[2], p. 16, 344–349）

の性格が見られる[34]。第一に、静的状態ではなく活動的状態である、第二に、すべての働きに共通する最も一般的で基本的な働きである、第三に、「〜から出てくる働き」である、つまり existere は、或るものがそこから existere するところの原因[35] による、その結果である、第四に、或る限定された何ものか（aliquid）が existere する。

そのうえで、トマスにおいて、essentia と〔実在的に〕区別されるべきなのは、existere ではなく、まさに esse だとされる[36]。トマスは、「ens は、essentia が、esse を受け取って、現実化し、existere する」と定式化する。トマスで最も重要なことは、「essentia と existentia の区別」ではなく、「**esse** と essentia」の区別である。トマスの esse は existere とは異なる。すなわち、エクシステレは〈何らかのものが、何らかの仕方で、何らかの場所にある〉のに対し、エッセは〈有るものに内在する存在の形相的現実的根源〉である。換言すれば esse は、特定のもの（主語）に属するのではなく、「純粋現実態」actus purus である[37]。ここにはトマス哲学の最重要命題が見出される。すなわち、第一に、existere の原因は esse である、第二に、esse の持つ働きは actus と呼ばれる（actus purus ＝Deus）が、この actus は、actualitas がそれの徴表であるところの existere の場合とは異なる、第三に、esse は existere が現実的である以上に現実的である[38]。

それゆえ、トマスも「Sein と Seiendes の区別（存在論的差異）」を知らず、「存在忘却の徒」であると言えるかについて、もし以上のような esse 概念がトマスになければそう言い得るかもしれない。ハイデッガー

34） 山田（1978）、343 頁（「第 37 章　エクシステレの意味を構成する四つの本質的性格」）

35） この働きの原因には、他者からの能動的な働きである causa agens と、そのものに内在する原理である causa formalis が存し、両方の原因への関係によって初めて物はエクシステレする。山田（1978）, 244 頁。

36） essentia と existentia との「実在的区別」（distinctio realis）の代表としてハイデッガーはトマスをあげ、その際スアレスの「概念的区別」やスコトゥスの「様相的区別」に対置する。GA24, S. 128–131.

37） 山田（1978）、362 頁他

38） 山田（1978）、348 頁

の Sein に応じる性格は esse にも見出せるとしてトマスを擁護する一人であるロッツは、たしかにトマスは *De Veritate*, q.I, a.1 で、esse のかわりに ens と言ってはいるが、しかしその場合 ens といっても一々の個物ではなく、「存在の活動」を意味しているのであって、それにより、ens はむしろ esse に帰され、esse こそ問いが最終的に目指すものとしてあらわれている、と解釈する[39]。

しかしそれにしても、ハイデッガーは、1927 年夏学期講義において、トマスの「実在的区別」を「essentia と existentia の区別」とのみ記し、「essentia と esse の区別」については述べていない（GA24, S. 128–131）。彼のトマス理解の当否自体が今われわれの問いではないし[40]、彼がはたしてトマスの創造する神＝actus purus から与えられる esse を見ていたかは措くとしよう。だが、少なくともハイデッガーの関心は最初から esse にはなく、まさにこの世界の存在者の存在にあること、すなわち、essentia に対して区別されるものとしての（esse ではない）existere にあるということは確かであろう。

οὐσία は、「が有る」ὅτι ἔστιν と「何で有る」τί ἔστιν とに区別されるが、その意味はどちらも「現前する」であったのが、その後、「作り作られたもの」として actualitas に転じたというのがハイデッガーの主張である。トマスの場合、existere は「が有る」に相当するが、esse は純粋現実態としていかなる「或るもの」にも限定されず帰属しない。existere は esse を原因として作られたものであり、esse を享受する限り、その意味はたんなる actualitas に尽きるものではないだろう。つまり少なくともトマスにおいては、「有るもの」は直前的眼前的な有り方に終始するのではなく、「〔esse を受け取って〕有らしめられて有るもの」なのである。その限り、中世では（キリスト教神学も含め）existere は actualitas になった

39） Lotz（1975）, S. 97f.

40） 山田晶教授は、ハイデッガーがトマスの著作よりもスコラ哲学の教科書を使用し、トマスを「存在忘却の徒」と見ていることは明らかだ、と述べている。山田（1978）、56–57 頁。

というハイデッガーの断定は、哲学史的には必ずしも妥当とはいえないであろう。

Ⅲ．ライプニッツ『二十四の命題』―existere を中心に

ゲルハルト版ライプニッツ哲学著作集 GP Ⅶ, 289–291（Berlin 1890）に収載されている僅か 3 頁のラテン語短篇は、無題の下に、命題が 1 から 24 まで箇条書きに並ぶだけの、しかも執筆事情も不明な〈謎の文書〉である。これをハイデッガーが『二十四の命題』（*Die 24 Sätze, Die 24 Thesen*）と命名し、1961 年の『ニーチェ』の第二巻で、解釈し、その原文を全文印刷させたこと、また 1955/56 年冬学期演習「根拠律」では参加者に原文を配布し一言一句解釈したことで、広く知られるようになった。第一命題の冒頭にみえる「なぜ或るものが現実存在し、むしろ無ではないのかの理由が本性／自然のうちにはある」（Ratio est in Natura, cur aliquid potius existat quam nihil）[41] が独り歩きし「在ることの不思議」等のキャッチ・コピーとともに流布したりもした。しかし実際のテクストは、神の存在論証の文脈で書かれ、スコラの術語をふんだんに使用し、伝統的形而上学の受容と改訂を趣旨としている。2013 年にハイデッガー全集第 84.1 巻『諸ゼミナール――カント―ライプニッツ―シラー』が刊行され（G・ノイマン編）、そこには、1935／36 年冬学期のライプニッツ演習（ハイデッガーによる演習準備覚書、受講生によるプロトコル、受講生による筆記ノートから成る）も収載された。その中でハイデッガーは『モナドロジー』等を解釈するが、『二十四の命題』にも簡潔ながら初めて言及する。また、1941 年の第一トリメスターと夏学期のシェリング講義を収めた全集第 49 巻においても、巻末に「付論（ライプニッツ）」として、『二十四の命題』のラテン語全文が印刷され、その第 1 命題と第 2 命題に

41） ハイデッガー自身も、例えば、1935 年夏学期講義『形而上学入門』では、冒頭から、この定式をドイツ語で、ライプニッツへの指示なしに、くり返し挙げている。GA40, S. 3ff.

はハイデッガーの詳しいコメントが付されている[42]。2018 年 9 月筆者は、マールバッハのドイツ文学アルヒーフにおいて、ハイデッガー所蔵のゲルハルト版著作集全七巻の調査を実施し、その第 7 巻収載の『二十四の命題』についてもハイデッガー自身による書き込み（Marginalien）を確認した。その詳細と、そこから明らかとなった哲学的意味については他で論じたので御覧いただければ幸いである[43]。

また、2020 年 11 月には、準備中のアカデミー版ライプニッツ全集第六系列第 5 巻（1690 年〜1703 年）の、その暫定版（Vorausedition）がインターネット上に公開され、N. 2680（『二十四の命題』）についても、「1698 年 9 月より後」という執筆年代とともに、ライプニッツ自身による多くの校訂の明細が公表された[44]。これに依拠しながら、「可能性」概念の改革としての『二十四の命題』の内容的特徴と思想的射程についても、筆者は他で発表した[45]。

本論文では、1941 年のハイデッガーが、形而上学の本質解明のために「Existenz」概念の歴史考察を遂行するにあたり、それがなぜ「ライプニッツ『二十四の命題』の理解に資する」とハイデッガー自身によって見られているのかを考えたい。具体的には、「可能性」概念の改訂としてハイデッガーの注目する[46]『二十四の命題』が、「現実存在」についてのこの 1941 年の講演によって理解可能とされるのは何故かを考えたい。「可能性」と「現実存在」を、排除しあう概念ではなく、両者の相互的な関係に着目し、あるいはむしろ一つのこととして「可能性—現実存在」を問おうとするハイデッガーは、「本質と存在」や「可能態と現実態」の伝統的区

42） GA49, S.199–203（Beilage（Leibniz）). GA49 におけるハイデッガーの『二十四の命題読解』の特徴と射程については酒井（2022）、409–411.

43） 酒井（2022）

44） 現在は、既刊の翻訳と編者の注を追加した 2021 年 11 月 1 日の改訂版が公開されている。

45） 酒井潔・口頭発表「A VI, 5（Vorausedition), N. 2680: *Ratio est in Natura*—1690 年代のライプニッツ形而上学」日本ライプニッツ協会第 13 回大会 2021 年 11 月 6 日。若干の修正・加筆の上、『ライプニッツ研究』第 7 号（2022 年 12 月 20 日刊）に掲載（1–25 頁）。

46） GA84.1, S. 406–409, 806–809.

別を克服しようとするライプニッツに少なからぬ共感を見出している。

『二十四の命題』の前景にあるのは、世界〔の existentia〕には、事物が有り（Daß-sein）、かつ何かで有る（Was-sein）ための「理由」（ratio）が、事物の本性／自然のうちにある、という命題である。その場合「理由」で指示されているのは、実在的理由（ratio realis）＝原因（causa）よりは、むしろ非実在的理由（ratio non realis）としての「本質」（essentia）または「概念」（ratio）である。ただし、本質すなわち可能は、それ単独では現実存在に達することはできず、現実に存在している事物のなかに（in re actu existente）、その本質があるときに初めてそのものは現実存在にいたる、と注記されている[47]。本質が示すのは（厳密には）事物はかくあり得るという、事物の可能性であり、つまり実在性（realitas）（事象内容性）である。ここでライプニッツは「可能性」は、伝統で言われるように、いまだ existentia でないものではなく、常にすでにそれ自身のうちに「現実存在への衝迫」（conatus ad existeniam）をもつとする（第 5 命題）。「すべて可能的なものは現実存在しようとしている」と述べるが（第 6 命題）、この existiturire はライプニッツによる造語である[48]。ハイデッガーは、可能性と現実存在、あるいはアリストテレスに帰せられる可能態と現実態の実在的区別を克服せんとする志向をライプニッツにも認め、これに賛同する。potentia と actus の伝統的区別に批判的なライプニッツは、「可能性」を言う語として、potentia でなく possibilitas を使う、とハイデッガーは注意している。『二十四の命題』の前面に出ているのは、「existentia を要求する」または「existentia へ衝迫する」ような可能性を意味するべく改革された「可能性」

47） 命題 2、6（GP VII, 289）

48） 『ニーチェ』（1961）の第 8 論稿「存在の歴史としての形而上学」――この論稿の執筆年代を 1941 年（講演「Existenz 概念の歴史について」の年）と推することも不可能ではない）――の中で『二十四の命題』が解釈されているが、ハイデッガーはこの造語を existere の未来分詞と ire（行く）からなる欲求動詞（verbum desiderativum）であるとし、「「存在しようとしている」という表現は、それの外見の不格好さにも拘わらず、それが語っている事柄の本質性ゆえにそれ自体美しい」と述べている。*Nietzsche*, II, 447.

（possibilitas）概念である。

しかし、A VI, 5 の暫定版に従って『二十四の命題』における関連術語の使用頻度をみると、ratio＝17、natura＝9, possibilis/possibilitas＝11、actus＝8 に対し、existere/ existentia は 22 回であって、それらのどれよりも多いのである。つまり『二十四の命題』で最も頻出する概念は、ratio, possibilits でも essentia でもなく、existentia なのである。改訂された possibilitas 概念の提示であるのに、existentia/existere の頻度の方が高いのはなぜか。それは、possibilitas は existentia を要求し、それ自身 existentia への衝迫である以上、つねにすでに、何らかの意味で、existentia を予想し先取りしていると考えられるからである。可能は現実存在への可能であり、現実存在は可能の現実存在なのである。可能は現実存在を含み、現実存在は可能を含む。『二十四の命題』の第一命題で提示されているように、この世界において存在する事物には必ずそれの「が有る」と「で有る」という二重の現実のための、その ratio がなければならない。そうだとすれば、「すべての可能的なもの」はまさにそのようなもの（すなわち existere する諸事物の原理（プリンキピウム）として）つねにすでに existere している、と言い得るのではないか[49]。「Existenz は可能なものに付加する特別のものでは全くない、それは可能そのものに属している」（GA84.1, S. 807）

《可能性の優位》に関連してひとつ注意しておきたい。それは可能なものはどれでも必然的に現実存在にいたるという理論なのか、それでは偶然性や自由の成立する余地はないのではないかといえば、もちろんそうではないということである。可能性（possibilitas＝ratio＝essentia）のなかには、数学や論理学、あるいは類や種の概念のように、現実存在に至らな

49） Vgl. Neumann（2020), S. 78.　さらに『ニーチェ』ではこう言われている：「可能なものの可能性（Möglichkeit）は有としてすでにひとつの「現実存在すること」であり、つまり本質的に existentia に関係している。可能なものはすでに、ただその限り、およそそれがそれであるところのもの、好む者（Mögendes)、予め傾向づけられた試み、したがって建て働きかけること（ein Gründen und Erwirken）である」GA 6.2, S. 407.

いものもある（ratio non realis）[50]。そして可能的なものどうしの争いの結果として現実存在に至らないものもあるからである（「無数の可能的世界」）。「可能」が必然的に現実化するというのではない。「理由律」は事実真理の原理（同一律は必然真理の原理）であるとライプニッツが言うように（A VI, 4B, N. 270）、この世界が有るという事実性からいわば遡って、その「アルケー」を問うならば、それは事物の本性／自然に内在する ratio（≠causa）でなければならない、という主旨なのである。

それでは、そういう「可能性の優位」のテクストである『二十四の命題』を理解するためになぜ「Existenz 概念の歴史について」の講演が役立つと、ハイデッガーは言うのだろうか。これについては、possibilitas と existentia の予想し含意しあう関係に加え、さらに、existere のその ex- ということにも着眼したい。すなわち現実存在は「何から（ex-）」sistere するのかといえば、それは実在的あるいは外的で偶然的な「原因」（causa）からだけでなく、それぞれの有るものの ratio, essentia としての可能性からである。その意味で現実存在は可能性と一体である。可能性と現実存在は、有るものの異なった Anwesen に他ならない。『二十四の命題』は possibilitas 概念[51]と同時に existentia 概念の改訂でもある。第一命題冒頭文にハイデッガーは「**現実存在の優位**」（**praevalentia existentiae**）とも書き込んでいる。可能は非存在よりも存在を（potius）、そしてより以上の存在を（plus）現実に要求してやまないのである（GA84.1,S. 806f.）。

50） ライプニッツにおいて、realis（実在的な）、realitas（実在性）という術語は、事象の内容ないし規定性という伝統的な意味を保持する一方で、この場合のように近代以降の actualitas や existentia の意味でも用いられる。GA84.1, S. 395.

51） 1935/36 年冬学期演習「ライプニッツの世界概念とドイツ観念論」で、ハイデッガーは、possibilitas に三つを区別。第一は、物の何であり、第二は、矛盾を含まぬことであって、両者は伝統的なものである、それに対して第三は、現実存在への傾向、衝迫、要求であり、これこそがライプニッツで新しく登場した意味だ、と述べている（GA84.1, S. 406f.）。

Ⅳ．ハイデッガーから見たライプニッツの「possibilitas—existentia」

ライプニッツにおいて existentia は、esse actu（現実に有ること）である。現実に有るとは個として有ることである。だが、それは時間空間上の位置に従って区別されて有るという意味ではなく、それ自身の「性質」[52] によって区別される。しかしそれは他のすべての物との、静的な固定した秩序ではなく、個の existentia は動的で可変的な生きた連関（因果関係はその一部であって全部ではない）のなかで規定される。ライプニッツにさらに即していえば、現実存在する個に関わるすべての事柄の系列は（内的規定、外的規定を問わず）あらかじめそれぞれの個の「個体概念」に含まれている。

ハイデッガーから見れば、ウシアから「現前」の内実（währen, weilen, bleiben 等）が失われ、「actualitas」（opus, Wirklichkeit, Gewirktes）に転じたという形而上学の歴史に、ライプニッツの existentia 概念は典型的に属してはいる。それどころか、possibilitas が現実存在への conatus（Drang）として際立たせられる点は、少し後の「技術」（*Die Frage nach der Technik*, vorgetragen in München am 6. Juni 1950）をめぐる一連の省察に深く関わる。そこでは近世以降の actualitas は、《〔技術的世界を統べている〕表象的意味への殺到や駆り立て》として強調されてゆく。

この 1941 年 6 月の講演ではハイデッガーは、〔プラトン以前の〕ギリシア人は「Anwesung ＝ Hervorkommen ins Unverborgene ＝ ἀλήθεια ＝ φύσις」という事態を解していたとの立場に立つ。そして、彼らが「essentia と existentia の区別」を知らなかったのは欠陥ではなく、「技

52） *Monadologie*, § 8.

術」の殺到に対抗するにはむしろ彼らこそ優位にある、と言う（GA80.2,S. 857–858）[53]。このように、ハイデッガーの「Existenz 概念の歴史」は、初めから、彼の言う「存在の歴史」、あるいは「存在忘却」の系譜の内で見られている。そして『二十四の命題』への彼の注目と解釈も、1936–38 年の『寄与論稿』で定礎された「存在の歴史」の文脈のなかで行われ、「現前から actualitas への変遷」というテーゼも、近代技術の「立て組み」（Gestell）とその「急き立て」に導く思惟の展開として、全体として批判的な意味で言われている。

しかし同時にハイデッガーはライプニッツに積極的な面を見ている。それは、essentia と existentia の伝統的区別への批判と、両者を同じ一つの事態として連続的統一的に見る視点である。「本質と存在」という固定化自明化した前提から自由になることが存在者の存在の意味への問いを取り戻し、存在忘却から回復することに繋がる。十七世紀のライプニッツにとっても essentia と existentia の区別は、可能態（potentia）と現実態（actus）というアリストテレスから伝承された権威として立ちはだかっていた。しかし彼はこの区別を、可能を「現実存在への要求」（exigentia ad existentiam）と定義することにより克服しようとする。可能（＝ratio, essentia）と現実存在を統一し得る概念が「力」（vis）である。（その経験科学への展開が、物体に内在する活力を扱う「動力学」（dynamica）である）。ハイデッガーが、「がある」Daß-sein と「何である」Was-sein の区別を「現前」によって統一しようとしたとすれば、ライプニッツは、可能と現実存在の区別を、「力」の概念で統一しようとし

53） たしかにアリストテレスは、ὀυσίια を超えて、後代に existentia, Existenz, Wirklichkeit, Dasein と呼ばれるものを規定した（GA80.2, S. 858）。しかし、そうして（先に述べたように）ὀυσία の「働き〔の結果〕」（ἔργον）が言われる場合でも、ἔργον はギリシア人では単なる opus ではなく現前化のうちへ置かれたもの、そしてそのように逗留するものを意味する。つまり、アリストテレスにおいても、ソクラテス以前の「現前」のモチーフは、ἔργον や ἐνέργαια にもかかわらず、保たれている、つまり ἔργον は、単なる作品や制作物とは違って、「現前化のうちへ置かれたもの、そしてそのように逗留しているもの」なのだとハイデッガーは見ている。GA80.2, S. 854.

た、といえよう。ハイデッガーの立場（前期の基礎存在論でも、後期の存在史的思索においても）、すなわち形式による事象の分断（存在の空虚な自明視、そして忘却）から自由に、有るものの「有る」の意味を問う立場からは、ライプニッツはそのつど注目に値するのであり、ハイデッガーは、くり返すように、好意的な批評を示している。

結 語

ハイデッガーはギムナジウム時代からアリストテレスとスコラの分厚い伝統に接し、これを遠ざけるのではなく、少なくとも咀嚼しようと努めた。（彼の教授資格請求論文が『ドゥンス・スコトゥスの範疇論と意義論』（1915）であったことが改めて想起されてよい）。その方法は原典の内在的読解であり、逐文逐語的解釈は、ギリシア哲学だけでなく、ライプニッツについても遂行されている。ハイデッガーが主要テクストとしたのは、彼の前期では『形而上学叙説』、『モナドロジー』、アルノー宛書簡[54]、後期では『二十四の命題』である[55]。

この 1941 年の講演「エクシステンツ概念の歴史」を、ハイデッガーの存在史的思惟の「予備段階」（Vorstufe）と位置付ける向きもあるかもしれない。いや、あるだろう。しかし前期であれ後期であれハイデッガーにおいて〈哲学史的考察〉と〈存在の思索〉の関係は、予備段階と本段階のそれではない。この講演の三年前に公刊を意図せず脱稿した『寄与論稿』（1936–38）の第二 Fuge「Zuspiel」は、「第一の始元の思惟」と「別の始元の思惟」とのあいだの「玉の投げ合い」に他ならない[56]。哲学史との

54） GA26, S. 87.

55） 酒井（2022）

56） 有るものを有るものとしているもの（Wesen des Seienden）への問いは形而上学の Leitfrage である。Sein が隠されていることが形而上学の Grund である。ゆえに、Sein（des Seienden）への問いは、形而上学自身がその上に成り立っている Grund を問うことである。これを形而上学の Grundfrage と言う。Was heißt Sein? ここにこそ形而上学ではない別の思惟の可能性は秘められている。Leitfrage と Grundfrage の差は存在論的差異に

取り組み／対決のなかでこそ「存在の思惟」・「性起の思惟」は熟すのであり、逆に、哲学史の読解は「基礎存在論」、「存在の歴史」を駆動力とし、これに触発され、「破壊／解体」が進められてゆく。哲学史とは別なところに哲学の問いがあるのではなく、まして「存在の問い」があるのでもない。「第一の始元の思惟」（「形而上学の歴史」）との取り組み／対決の徹底を通してのみ、「別の始元の思惟」への道も示されるであろう。

【略記法】

A＝*Gottfried Wilhelm Leibniz. Sämtliche Schriften und Briefe*, Berlin 1923–

〔例：A VI, 4. N. 314, S. 1634–1635 ＝ 第 VI 系列、第 4 巻、作品番号 314、1634–1635 頁〕

GP＝Gerhardt（Hg.), *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*, 7Bde. Berlin 1875–1890. Reprint: Hildesheim/New York 1978.

GA＝*Martin Heidegger Gesamtausgabe*, Frankfurt a. M. 1974–.

【文献一覧】

GA2: *Sein und Zeit*, hrsg. v. Fr.-Wilhelm von Herrmann, 1977; *Sein und Zeit*, 12. unveränd. Aufl. Tübingen 1972.

GA6.1: *Nietzsche*, Erster Band, hrsg. v. Brigitte Schillbach, 1996; *Nietzsche*, Bd. 1, Pfullingen 1961.

GA6.2: *Nietzsche*, Zweiter Band, hrsg. v. Brigitte Schillbach, 1997; Nietzsche, Bd. 2, Pfullingen 1961.

GA10: *Der Satz vom Grund*, hrsg. v. Petra Jaeger 1997; *Der Satz vom Grund*, Pfullingen 1957.

GA24: *Die Grundprobleme der Phänomenologie*, Vorl. SS1927, hrsg. v. Friedrich-Wilhelm von Herrmann, 1975.

GA26: *Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz*,Vorl. SS1928, hrsg. v. Klaus Held, 1978.

GA35: *Einführung in die Metaphysik*. Vorlesung SS1935, hrsg. v. Petra Jaeger, 1983.

GA41: *Die Frage nach dem Ding*. Vorl. WS1935/36, hrsg. v. Petra Jaeger, 1984.

対応する。歴史上のさまざまな学説との対決を通して Grundfrage は自らを問う。Leitfrage と Grundfrage の対決の進行が Zuspiel である。ハイデッガーによるライプニッツやデカルトなどの Interpretation もすべて Zuspiel に編入され得る。GA65, S. 169–224.

GA49: *Die Metaphysik des deutschen Idealismus. Zur erneuten Auslegung von Schelling: Philosophische Untersuchungnen über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände*（*1809*）, Vorlesung 1941, hrsg. v. Günter Seubold, 1991.

GA51: *Grundbegriffe*. Vorlesung SS1941, hrsg. v. Petra Jaeger, 2., durchg. Aufl. 1991.

GA65: *Beiträge zur Philosophie*, hrsg. v. Friedrich-Wilhelm von Herrmann, 1989.

GA66: *Besinnung*,（1938/39）, hrsg. v. Friedrich-Wilhelm von Herrmann, 1997.

GA69: *Die Geschichte des Seyns*, hrsg. v. Peter Trawny, 1998.

GA80.2: *Vorträge*（Teil 2: 1935 bis 1967）, hrsg. v. Günther Neumann, 2020.

GA 84.1: *Seminare. Kant-Leibniz-Schiller*,（besonders）Seminar WS 1935/36, hrsg. v. Günther Neumann, 2013.

『根拠律』辻村公一訳、創文社 1962

・A VI, 5（Vorausedition: Internet Nov. 2021）, N. 2680: *Ratio est in Natura*; GP VII, 289–291; *Die 24 Sätze*, in Heidegger, *Nietzsche*, Bd. 2, Pfullingen 1961, S. 454–457; GA6.2, S. 414–416.

・A VI, 4, N. 270: *De veritatibus primis*（Mitte bis Ende 1680（?）; GP VII, 194f.

・A VI, 4, N. 312; GP VII, 309–318: *Specimen inventorum de admirandis naturae Generalis arcanis*（1688（?）.

・A VI, 4, N. 314: *De ratione cur haec existant potius quam alia*.1689（?）.

・A VI, 4, N. 324: *Principia Logico-Metaphysica*（Frühjahr bis Herbst 1689（?））; Couturat（éd）, *Opuscules et fragments inédits de G. W. Leibniz*, Paris 1903, p. 518–523（*Prima veritates*）.

・GP VII, 302–398: *De rerum originatione radicali*, Nov. 1697.

・GP IV, 504–516: *De ipsa natura sive de vi insita actionibusque Creaturarum, pro Dynamicis suis confirmandis illustrandisque*, Sep. 1698（in: *Acta Eruditorum*）

・GP VI, 607–623: *Monadologie*

・『自然そのもの』（河野与一訳『単子論』岩波文庫 1951）

・Aristoteles, *Metaphysik*, übers. v. F. F. Schwarz, Stuttgart 1978;『形而上学』出隆訳、岩波文庫 1959/61

・Thomas von Aquin, *De ente et essentia*（deut.-latein.）, übers. v. R. Allers,

Darmstadt 1976.
・Kant, Immanuel, *Kritik der reinen Vernunft*, hrsg. v. R. Schmidt, Phil. Biblio. Hamburg 1971.

・Antognazza（2009）＝Maria Rosa Antognazza, *Leibniz. An Intellectual Biography*, New York 2009.
・Coriando（2013）＝ Paola-Ludovika Coriando, *Individuation und Einzelsein. Nietzsche - Leibniz - Aristoteles*, Frankfurt a. M. 2003.
・Gilson（1948）＝ Étienne Gilson., *L'être et l'essence*, 1948; 2e éd. rev. et augm., Paris 1962.
・Herrmann（2015）＝Friedrich Wilhelm von Herrmann, *Leibniz. Metaphysik als Monadologie*, Berlin 2015.
・Neumann（2017）＝Günther Neumann, *Die Gesamtinterpretation der "Monadologie" in Heideggers Leibniz-Seminar vom Wintersemester 1935/36*, in: *Heidegger Studies*, vol. 33, Berlin 2017, S. 27–75.
・Neumann（2019）＝Günther Neumann, *Sein und Monade. Leibniz' "Monadologie" als eine Quelle Heideggers für die metaphysische Seinsfrage*, in: *Heidegger Studies*, vol. 35, Berlin 2019, S. 161–174.
・Neumann（2020）＝Günther Neumann, *Heidegger und Leibniz*（ *Das Denken Martin Heideggers*, II 2, hrsg. v. Hans - Christian Günther), Nordhausen 2020.
・Neumann（2019）＝Günther Neumann, *Der Freiheitsbegriff bei Gottfried Wilhelm Leibniz und Martin Heidegger*, Berlin 2019.
・Sakai（1993）＝Kiyoshi Sakai, *Zum Wandel der Leibniz-Rezeption im Denken Heideggers*, in: *Heidegger Studies*, vol. 9, Berlin 1993, S. 97–124.
・Wirbelauer（2006）＝Eckhard Wirbelauer（Hrsg.), *Die Freiburger Philosophische Fakultät 1920–1960. Mitglieder-Strukturen-Vernetzungen*, Freiburg/München 2006.

・山田（1978）＝山田晶『トマス・アクィナスの《エッセ》研究』創文社 1978
・山田（1986）＝山田晶『トマス・アクィナスの《レス》研究』創文社 1986
・酒井（2022）＝酒井潔「ハイデッガーによるライプニッツ『二十四の命題』読解——書き込みと演習覚書を中心に」、陶久明日香・長綱啓典・渡辺和典編『モナドから現存在へ』工作舎 2022. 3, 390–430 頁